

国立国語研究所学術情報リポジトリ

現代日本語における外来語使用実態調査（2023年2月調査）の概要と分析事例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 牧郎, 久屋, 愛実, 相澤, 正夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000287

現代日本語における外来語使用実態調査 (2023 年 2 月 調査) の概要と分析事例

田中牧郎・久屋愛実・相澤正夫

1. 調査の概要

国立国語研究所共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」(プロジェクトリーダー:朝日祥之)では、多様化の進む日本社会に内在する言語問題の解明に資するため、各種の調査研究を実施している。具体的には、住民の日常の言語生活に欠かせない行政や医療福祉の分野など、公共性の高い場面における言語問題を対象として取り上げている。その一環として、この外来語使用実態調査(以下、本調査)は、国立国語研究所が2002年~2006年に行った「外来語言い換え提案」のための調査研究に基づき、文化庁による関連調査も参照しながら、その後の20年間に生じた外来語をめぐる変化の種々相を明らかにするために実施した。

本調査では、外来語の認知率・理解率はどうか、ほぼ同義関係にある外来語と既存語のどちらを選好するか、また、その選好におけるスタイル差はどうなっているか、という3つの観点から2023年現在の実態を把握し、2000年代前半に実施された同趣旨の調査との経年比較を行った。調査対象となった外来語は22語で、全国20歳以上の男女3600人を対象に、2023年2月に往復郵送法によって調査し、1486人から回答を得た(回収率41.3%)。実施は一般社団法人中央調査社に委託した。調査対象者を層化抽出する枠組みは、地域、都市規模、性、年代である。なお、本調査の調査票、調査結果の単純集計データは、国立国語研究所学術情報リポジトリからダウンロードできる(朝日編2024)。

2. 質問とそのねらい

2.1 質問の構成

本調査は、選定した外来語ごとに全部で22の大問(Q1~Q22)から構成されるが、これらは小問による質問法の違いによって大きく3つのタイプに分けられる(以下、2.2、2.3、2.4で詳述)。対象語の選定と質問法については、先行する全国規模の外来語関連調査やKuya(2019)を参考にしている。

大問を構成する小問には、①外来語の認知率と理解率を把握する質問、②外来語と既存語のどちらを選好するかをその際のスタイル差とともに把握する質問の2種類があり、この調査では、①②の両方からなる大問(Q11~Q22)と、②のみからなる大問(Q1~Q10)とが採用されている。さらに前者は、外来語と既存語の2語間のスタイル差を扱うもの(Q11~Q21)と、外来語・和語・漢語の3語間のスタイル差を扱うもの(Q22)との2つに分けられるので、都合3タイプということになる。

なお、調査票における3タイプの配列順は、単純な質問からより複雑な質問へと進むよう配慮されている。また、いずれのタイプに関しても、第3節で後述する、2000年代前半

に行われた調査との経年的な比較が行えるようになっている。

2.2 外来語と既存語の選好と、そのスタイル差を把握する質問 (Q1~Q10)

まず、外来語と既存語のいずれを選好するかを、そのスタイル差とともに把握する問いは、次のような質問文で調べた。Q1~Q10 までが、これに相当する。

Q1-1. 次のような文を親しい人に話すとき、「ゲット」と「獲得」のどちらを使いますか。両方使う場合は、より多く使う方を回答してください。もし、使ったことがない場合は、どちらを使いそうかを答えてください。

「商品を（ゲット／獲得）する」

1 ゲット 2 獲得

Q1-2. では、同じ文を、他人に読んでもらうために書くときはどうですか。両方使う場合は、より多く使う方を回答してください。もし、使ったことがない場合は、どちらを使いそうかを答えてください。

1 ゲット 2 獲得

はじめの小問 (Q1-1) の「親しい人に話すとき」と、あとの小問 (Q1-2) の「他人に読んでもらうために書くとき」との違いによって、くだけた場面（低文体）と改まった場面（高文体）とのスタイル差を把握することができる考えた。

「ゲット/獲得」のほか、「ルール/規則」、「チャレンジ/挑戦」、「チャンス/機会」、「ワイン/ぶどう酒」、「プロセス/過程」、「オープン/開店」、「トータル/合計」、「スーツ/背広」、「イベント/催し」の全部で 10 対を、同様の質問文によって調査した。対象語の選定は、後述する文化庁による 2000 年調査に含まれている語と、Kuya (2019) で取り上げられたコーパスにおける高頻度語をもとに行った。

2.3 外来語の認知率・理解率と、外来語と既存語の選好をスタイル差とともに把握する質問 (Q11~Q21)

次に、外来語の認知率と理解率を把握した上で、その外来語と同義性の高い既存語とのいずれを選好するかを、スタイル差とともに把握する問いは、次のような質問文を設定した。Q11 から Q21 までが、これに相当する。

Q11-1. あなたは、「リスク」という言葉を、見たり聞いたりしたことはありますか。

1 ある 2 ない

(Q11-1 で「1 ある」と答えた人に)

Q11-2. では「リスク」という言葉が、「危険性」と同じ意味で使われることがあることを知っていますか。

- 1 知っている 2 知らない

(Q11-2で「1 知っている」と答えた人に)

Q11-3. では、次のような文を親しい人に話すとき、「リスク」と「危険性」のどちらを使いますか。両方使う場合は、より多く使う方を回答してください。もし、使ったことがない場合は、どちらを使いそうかを答えてください。

「感染の（リスク／危険性）がある」

- 1 リスク 2 危険性

(Q11-2で「1 知っている」と答えた人に)

Q11-4. では、同じ文を、他人に読んでもらうために書く場合はどうですか。両方使う場合は、より多く使う方を回答してください。もし、使ったことがない場合は、どちらを使いそうかを答えてください。

1番目の小問は、外来語の認知率を、2番目の小問は、外来語の理解率を、それぞれ把握するためのものである。3番目と4番目の小問は、外来語と、同義性の高い既存語との間のスタイル差を把握するためのもので、2.2で述べた対の場合と同様の設問になっている。

「リスク／危険性」のほか、「スキーム／計画」、「メリット／利点」、「ビジョン／展望」、「ポジティブ／前向き」、「コンセンサス／合意」、「ニーズ／需要」、「スキル／技能」、「ハザードマップ／災害予測地図」、「チョイス／選択」、「キャンセル／取り消し」の、全部で11対について、同様の質問文で調査した。対象語の選定は、後述する国立国語研究所が2002～2004年に行った「外来語定着度調査」に取り上げられた外来語のうち、ほぼ同義の既存語が想定されるものをもとに行った。

2.4 外来語の認知率・理解率と、外来語・和語・漢語の選好をスタイル差とともに把握する質問 (Q22)

さらに、外来語の認知率と理解率を把握した上で、その外来語と同義性の高い既存語が和語と漢語にわたる場合について、3語の選好をスタイル差とともに把握するために、次の質問文を設定した。Q22の1問がこれに相当する。

Q22-1. あなたは、「サポート」という言葉を、見たり聞いたりしたことがありますか。

- 1 ある 2 ない

(Q22-1で「1 ある」と答えた人に)

Q22-2. では「サポート」という言葉が、「手助け」「支援」という意味で使われることがあることを知っていますか。

- 1 知っている 2 知らない

(Q22-2 で「1 知っている」と答えた人に)

Q22-3. 言葉の使い分けについてお聞きします。話す相手によって、使う言葉も変わってくると思います。ここでは、友だちどうしで話すとき、大勢の人の前で話すとき、初対面のお年寄りと話するときの3つの場面で、あなたが使う言葉をお尋ねします。

まず、友だちどうしで話すとき、次のどの言葉を使いますか。

「新しく農業を始めるには、地域の（サポート／手助け／支援）が必要です。」

1 サポート 2 手助け 3 支援

(Q22-2 で「1 知っている」と答えた人に)

Q22-4. では、大勢の人の前で話すときは、どの言葉を使いますか。

「新しく農業を始めるには、地域の（サポート／手助け／支援）が必要です。」

1 サポート 2 手助け 3 支援

(Q22-2 で「1 知っている」と答えた人に)

Q22-5. では、初めて会うお年寄りと話ときは、どの言葉を使いますか。

「新しく農業を始めるには、地域の（サポート／手助け／支援）が必要です。」

1 サポート 2 手助け 3 支援

1 番目の小問は、外来語「サポート」の認知率を、2 番目の小問は、同じく理解率を把握するための小問である。そして、3 番目から 5 番目の小問は、「サポート」と同義性の高い、和語「手助け」や漢語「支援」との間での選好を、そのスタイル差とともに把握するためのものである。「友だちどうしで話すとき」「大勢の人の前で話すとき」は、くだけた場面（低文体）か改まった場面（高文体）かのスタイル差が現れると考え、「初めて会うお年寄りと話するとき」は、相手を思いやったりやさしく言ったりするスタイルが現れる場面と考えることができる。これらの質問文は、後述する国立国語研究所が 2004 年に実施した調査 (2) で「サポート」が取り上げられたときと全く同じものになっており、約 20 年を隔てた 2 つの調査結果のデータを直接比較できるように設定したものである。

3. 2000 年代前半に行われた外来語に関する調査

本調査が比較対象とする過去の調査は、国立国語研究所と文化庁によって 2000 年代前半に実施されたものである。比較できる過去の調査との関係については、巻末の付表を参照してほしい（前述したコーパスにおける高頻度語の情報（Kuya 2019）も併せて示す）。

3.1 国立国語研究所による調査

国立国語研究所による調査は、独立行政法人の事業として、2002 年から 2006 年にかけて行われた、公共的な媒体で多用されている定着していない外来語を分かりやすくする工夫を提案する「『外来語』言い換え提案」（国立国語研究所「外来語」委員会 2006、相澤

2012) に関する調査である。外来語についての国民の意識、自治体による外来語への対応、外来語の定着段階などの実態が分かるデータを提供することを目的に実施された。この時に行われた調査には次の4つがある。このうち(2)と(4)の一部に、本調査と比較すべきデータがある¹。

- (1) 「外来語に関する意識調査」(2003年10～11月実施)(国立国語研究所 2004a)
<https://repository.ninjal.ac.jp/records/2319>
- (2) 「外来語に関する意識調査Ⅱ」(2004年10～11月実施)(国立国語研究所 2005)
<https://repository.ninjal.ac.jp/records/2320>
- (3) 「行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査」(2003年11月実施)(国立国語研究所 2004b) <https://repository.ninjal.ac.jp/records/2318>
- (4) 「外来語定着度調査」(2002年11月～2004年8月実施)(国立国語研究所 2007) https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo_yoron/

まず、(4)は、定着していない外来語を特定するために、白書・新聞など公共的な媒体に用いられる外来語405語について、認知、理解、使用の有無を回答してもらったものである²。調査員による面接調査として、社団法人中央調査社に委託して実施された。文化庁が実施する「国語に関する世論調査」に組み入れて行われたものと、中央調査社が毎月行っていたオムニバス調査の枠組みの中で行われたものがあり、前者は16歳以上の750人が対象、後者は16歳以上の男女2111～2118人を対象に実施された(田中 2007b)。この調査と本調査とで比較できるのは、外来語13語(「イベント」「キャンセル」「コンセンサス」「スキーム」「スキル」「チョイス」「ニーズ」「ハザードマップ」「ビジョン」「ポジティブ」「メリット」「リスク」「ルール」)の認知率と理解率である。認知率と理解率は、本調査のQ11～Q22それぞれの中の前半の小問である³。

そして、(2)は、外来語について国民の意識を調べた調査で、15歳以上の4500人を対象にした、調査員による面接調査で、社団法人新情報センターに委託して実施されたものである。その中に、上述した外来語「サポート」と「手助け」「支援」の選好とそのスタ

¹ (1)の調査では「キャンセル」が調査対象となっているが、質問文や設問が本調査のものとは異なるため、厳密な比較は難しい。(3)の調査に関しては、本プロジェクトでも「行政情報を分かりやすく伝える工夫に関する意識調査(自治体調査)Ⅱ」を実施しており、外来語への対応に関して経年比較を行うことができる。

² この調査では、外来語を示して、その言葉の見聞き(認知)を問う部分は本調査と同じ質問文で行われたが、その言葉の意味(理解)を問う部分は本調査とは異なり、その「言葉の意味が分かりますか」という質問文で行われており、比較を行う場合に注意が必要である。

³ このうち、Q2とQ10に配置された「ルール」と「イベント」については、認知率・理解率のデータはない。

イル差についての調査が含まれている。

3.2 文化庁による調査

文化庁による調査は、2000年に実施された「平成11年度国語に関する世論調査」（文化庁2000）の中にある、外来語と同義性が高い既存語（和語・漢語・混種語）の対について、そのいずれを選好するかを調べたものである。そのうち、5つの対（「ゲット/獲得」「ワイン/ぶどう酒」「オープン/開店」「トータル/合計」「スーツ/背広」）が、本調査の、Q1、Q5、Q7、Q8、Q9においても対象にされている。文化庁によるこの調査は、16歳以上の3000人を対象にした面接調査で、社団法人中央調査社に委託して実施された。ただし、本調査と、文化庁が2000年に実施した調査とでは、質問文が異なっているところがあり⁴、直接の比較は難しい。

なお、これらの語の対は、ほぼ同じ質問文で2016年に実施された「平成27年度国語に関する世論調査」（文化庁2016）でも扱われており、2000年、2016年、2023年の3つの時点のデータを用いることもできるようになっている。

4. 調査結果

4.1 外来語と既存語の選好とそのスタイル差（Q1～Q10）

外来語と既存語の選好をスタイル差とともに把握する問い（2.2参照、Q1～Q10）について、回答を集計したデータを示すと、図1、図2の通りである。無回答の数値は低いので数値の表示は省略した。語の配列は問いの順ではなく、図1、図2ともに「親しい人に話すとき」に「外来語を使う」という回答の比率が高い順になっている。

⁴ 文化庁の調査の質問文は、「ワイン/ぶどう酒」のように、外来語と既存語の対を示し、2つの語は「同じ意味を表しますが、あなたは、ふだんどちらを主に使いますか」というものであり、本調査の質問文が、使用相手や話すときか書くときかなど（スタイル）を限定しているのとは異なっている。また、文化庁の調査では、外来語と既存語の「どちらも同じぐらい使う」という選択肢を用意しているのに対して、本調査では、外来語か既存語かの2つしか選択肢がない、という違いもある。こうしたことから、この質問に対する回答のデータは、直接的な比較はできないものになっている。

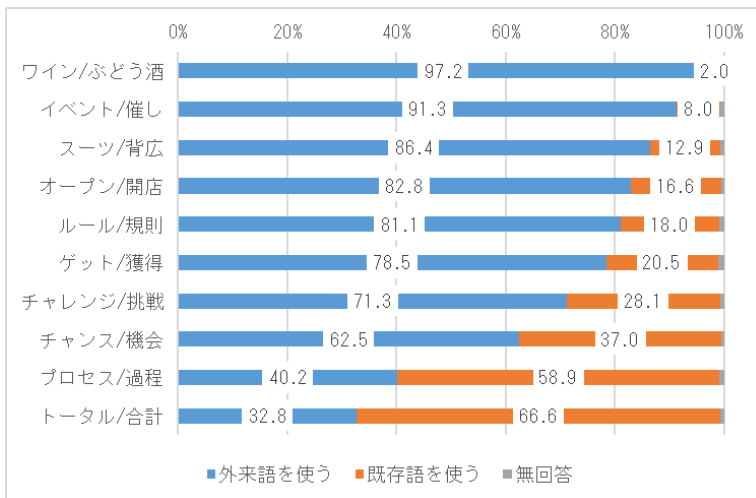


図1 親しい人に話すとき (%)

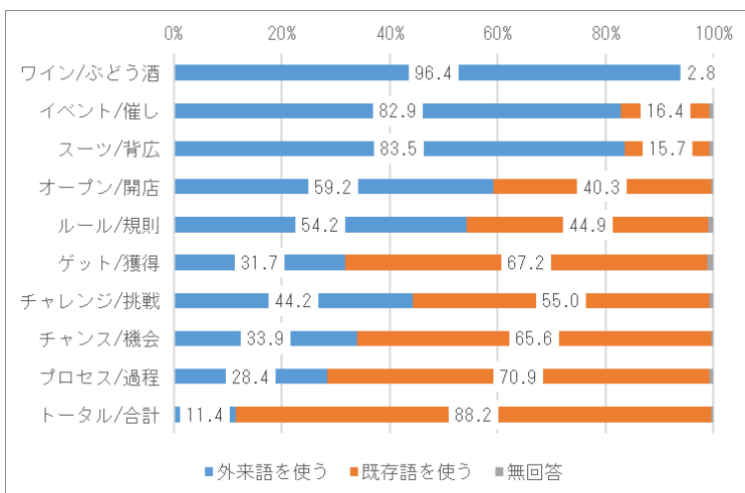


図2 他人に読んでもらうために書くとき (%)

図1の「親しい人に話すとき」では、「外来語を使う」比率が高い対が多く、「ワイン/ぶどう酒」「イベント/催し」のように90%を超えるものもある。一方、「プロセス/過程」「トータル/合計」のように「既存語を使う」比率の方が高い対もある。図2の「他人に読んでもらうために書くとき」では、「外来語を使う」比率の方が高い対と、「既存語を使う」比率の方が高い対とが、半々になっている。このように、親しい人と話すとき（低文体）では、外来語が選好されやすく、他人に読んでもらうために書くとき（高文体）では、外来語が選好されやすい対と、既存語が選好されやすい対とが同程度ある。外来語を選好するか既存語を選好するかには、確かなスタイル差（低文体では外来語、高文体では既存語という傾向の違い）があると言えよう。

図3は、「外来語を使う」と回答した人の比率を、「親しい人に話すとき」と「他人に読んでもらうために書くとき」のスタイル間で比べられるように、棒グラフに並べて示した

ものである。

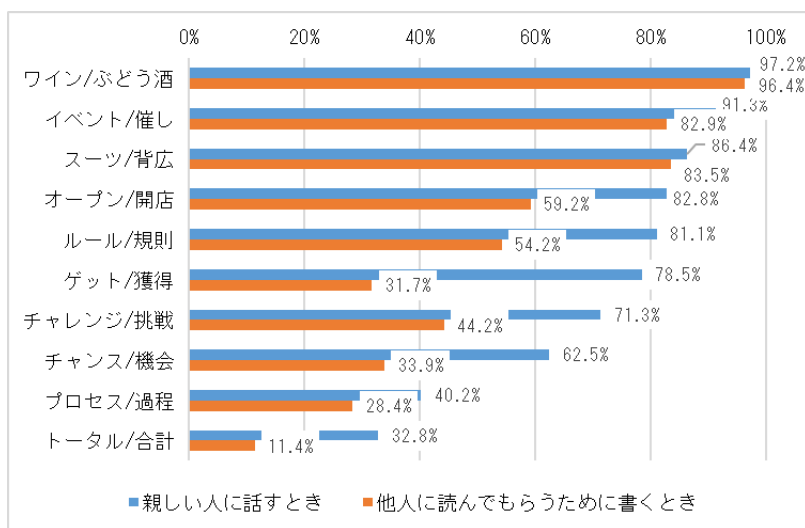


図3 スタイルによる「外来語を使う」の比率の違い(%, Q1~Q10)

図3から、「親しい人に話すとき」に「外来語を使う」という回答の比率が85%以上など高い対では、「親しい人に話すとき」と「他人に読んでもらうために書くとき」とのスタイルによる選好の度合いの差が小さい傾向があり、その比率が85%未満などそれほど高くない対では、スタイルによる選好の度合いの差が大きい傾向のあることがわかる。

一方で、「外来語を使う」比率がそれほど高くない語であっても、スタイル間に40ポイント以上の差がある対(「ゲット/獲得」)もあれば、10ポイント余りの差にとどまる対(「プロセス/過程」)もあるなど、語による差異も大きいことが見えている。

外来語を使うか既存語を使うかの選好が語によって差異が大きいことや、そのスタイル差にも語による大きな差異があることについて、その背景や事情の考察が求められる。

4.2 外来語の認知率・理解率、外来語と既存語の選好と、そのスタイル差(Q11~21)

外来語の認知率・理解率と、外来語と既存語の選好とそのスタイル差の両方を調べる質問(2.3参照、Q11~Q21)について、回答を集計したデータを示す。なお、認知率・理解率については、後述するQ22の「サポート」についてのデータもそこにまとめて示す。

(1) 外来語の認知率・理解率

まず、外来語の認知率・理解率の調査結果のデータを示したものが図4である。ここで言う「認知率」とは、その外来語を「見聞きしたことがある」と回答した人数が全回答者の人数の中で占める比率である。同じく「理解率」とは、その外来語と既存語の対が「同じ意味であることを知っている」と回答した人数の比率である。この場合の比率は、最初の小問で「見聞きしたことがある」と回答した人数の中で占める比率ではなく、最初の小問を尋ねた全人数の中で占める比率を計算したものである。データの配列は問いの順では

なく、認知率の高い順になっている。

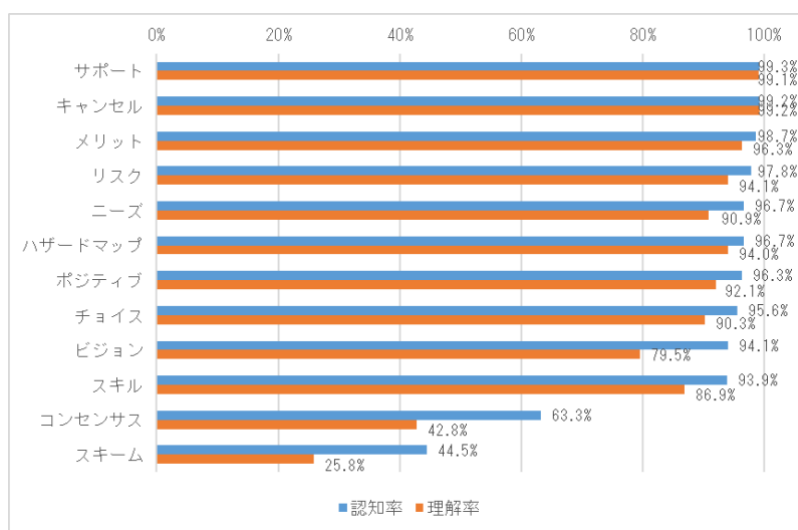


図4 外来語の認知率と理解率 (%)

図4において、「サポート」から「スキル」までは、認知率が90%を超えており、これらの外来語では理解率も総じて高く、90%を超えるものが多いことがわかる。一方、「スキル」や「ビジョン」のように、認知率が90%を超えていても、理解率が80%台、70%台に落ち込む語も一部にある。また、「コンセンサス」と「スキーム」は、他の語に比べて認知率がかなり低く、60%台、40%台になっており、これらは、理解率も一段と低く、40%台、20%台になっている。

(2) 外来語と既存語の選好と、そのスタイル差

次に、外来語と既存語のいずれを選好するかと、その差異のスタイル差についてのデータを示したのが、図5と図6である。2つめの小問（理解率）で、「同じ意味であることを知っていた」と回答した人だけに、3つめと4つめの小問で質問し、得られた回答をもとに集計したものである。データの配列は、「親しい人に話すとき」に「外来語を使う」と回答した比率が高い順になっている。

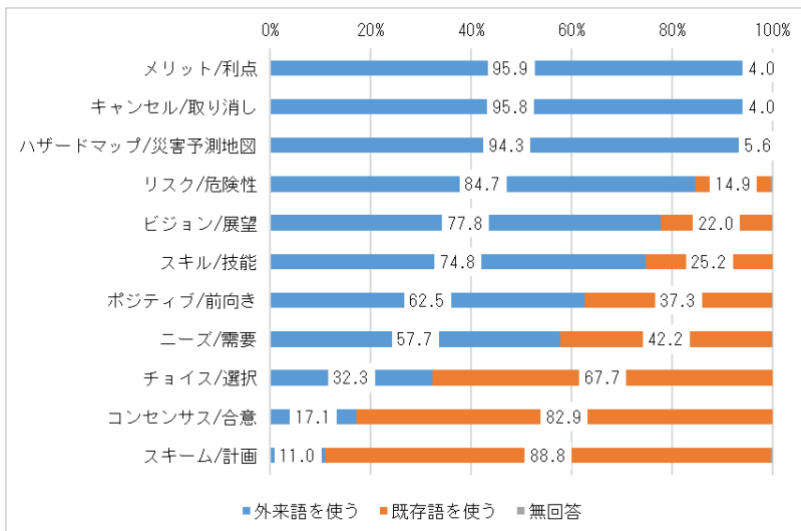


図5 親しい人に話すとき (%)

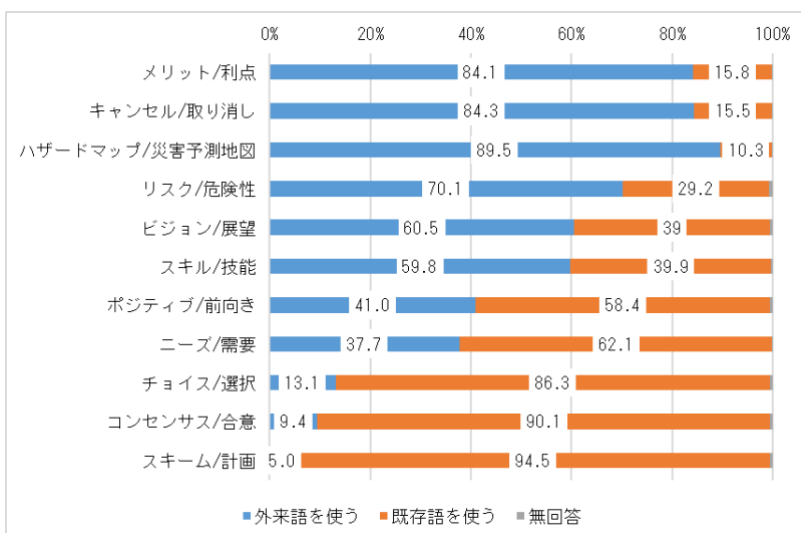


図6 他人に読んでもらうために書くとき (%)

図5の「親しい人に話すとき」では、「外来語を使う」が高い対が多く、「メリット/利点」「キャンセル/取り消し」、「ハザードマップ/災害予測地図」など90%を超えるものがある。一方、「チョイス/選択」、「コンセンサス/合意」、「スキーム/計画」など「既存語を使う」の方が高い対もある。図6の「他人に読んでもらうために書くとき」では、「外来語を使う」の方が高い対が6つあるものの、90%を超えるものはなく、「既存語を使う」の方が高い対が5つと半数近くを占める。ここから、外来語を愛好するか既存語を愛好するかには、確かなスタイル差（低文体では外来語、高文体では既存語という傾向の違い）があることが見て取れる。これは、4.1の図1、図2で見たQ1～Q10の結果と同じ状況で

ある。図7は、「外来語を使う」と回答した人の比率を、「親しい人に話すとき」と「他人に読んでもらうために書くとき」で比べられるように、棒グラフに並べて示したものである。

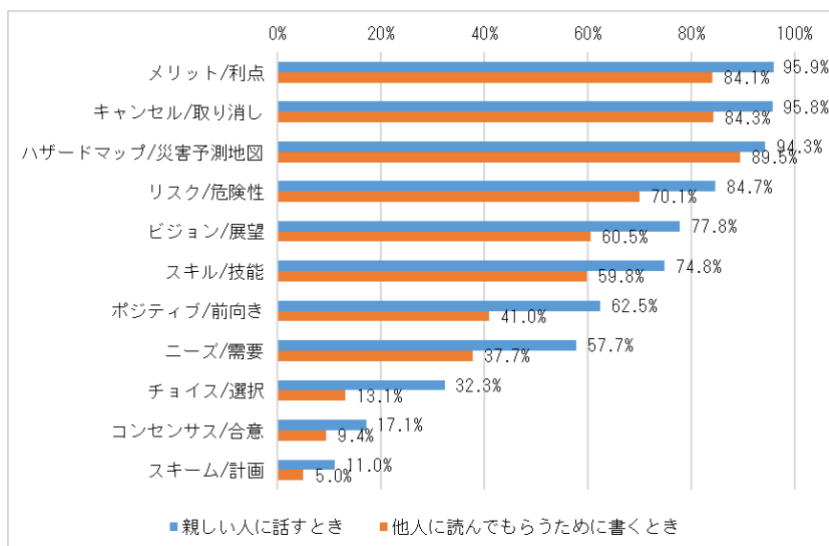


図7 スタイルによる「外来語を使う」の比率の違い(%, Q11~21)

図7から、「親しい人に話すときに」に「外来語を使う」という回答の比率が、90%以上など高い対では、「親しい人に話すとき」と「他人に読んでもらうために書くとき」とのスタイルによる差は小さい傾向があり、その比率が90%未満など、それほど高くない対では、そのスタイル差が大きい傾向が見えている。また、スタイル差の大小に語による差異があることもわかる。これらは、4.1の図3で見た、Q1~Q10の結果と同じ傾向で、その背景や事情を考察することが望まれる。

4.3 外来語・和語・漢語の3語のスタイル差(Q22)

同義性の高い外来語・和語・漢語の3語の選好が、「友だちどうして話すとき」「大勢の人の前で話すとき」「初めて会うお年寄りと話すととき」の3者を相手にする場合のスタイルの違いによって、どう変わるのかの調査において、取り上げたのは「サポート」「手助け」「支援」の一組である。その回答を集計したデータをグラフにまとめたものが、図8である。

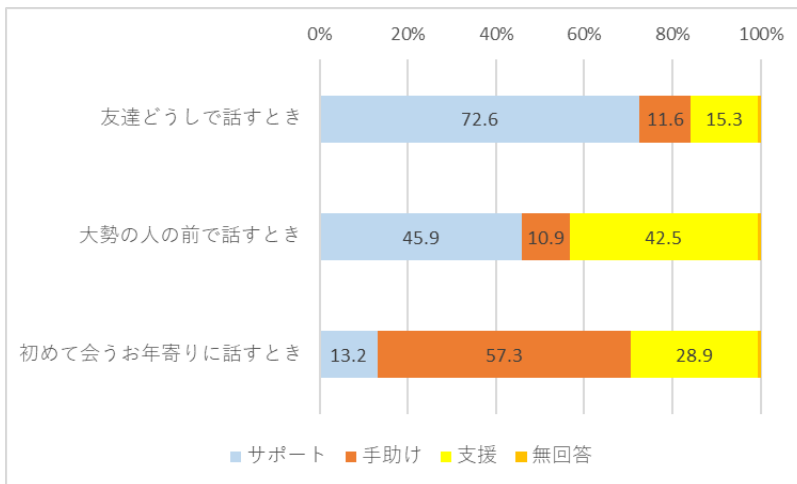


図8 外来語・和語・漢語の選好のスタイル差 (%)

図8によれば、「友達どうして話すとき」のくだけた場面（低文体）では外来語「サポート」がよく選ばれ、「大勢の人の前で話すとき」の改まった場面（高文体）では外来語「サポート」と漢語「支援」がいずれも同程度に選ばれ、「初めて会うお年寄りに話すとき」の相手を思いやる場面では、和語「手助け」がよく選ばれる、という結果が得られた。

5. 2000年代前半の調査との比較

本調査は、約20年前の同趣旨の調査と経年的な比較を行うことを重要な目的の1つとしている。そこで、外来語の認知率と理解率、外来語と既存語の選好、その際のスタイル差、という3つの観点から、約20年を隔てた変化の概要を見ておこう。

5.1 外来語の認知率・理解率の経年比較

まず、本調査のQ11からQ22で調べた外来語の認知率と理解率について、2002年～2004年に国立国語研究所によって行われた「外来語定着度調査」の結果 (https://mmsrv.ninjal.ac.jp/gairaigo_yoron/) と比較したものが、表1（認知率）と表2（理解率）で、それらをグラフで示したのが、図9と図10である。いずれの図表においても、語の配列は、本調査（2023年）における認知率の高い順になっている。

表1 認知率の経年比較 (%)

外来語	2002-2004 年	2023 年
サポート	92.7	99.3
キャンセル	94.7	99.2
メリット	91.1	98.7
リスク	87.3	97.8
ニーズ	85.0	96.7
ハザードマップ	34.6	96.7
ポジティブ	58.6	96.3
チョイス	71.1	95.6
ビジョン	84.1	94.1
スキル	45.2	93.9
コンセンサス	47.5	63.3
スキーム	19.6	44.5

表2 理解率の経年比較 (%)

外来語	2002-2004 年	2023 年
サポート	81.8	99.1
キャンセル	88.7	99.2
メリット	82.7	96.3
リスク	71.5	94.1
ニーズ	64.9	90.9
ハザードマップ	20.3	94.0
ポジティブ	40.1	92.1
チョイス	55.0	90.3
ビジョン	61.6	79.5
スキル	28.0	86.9
コンセンサス	24.0	42.8
スキーム	10.4	25.8

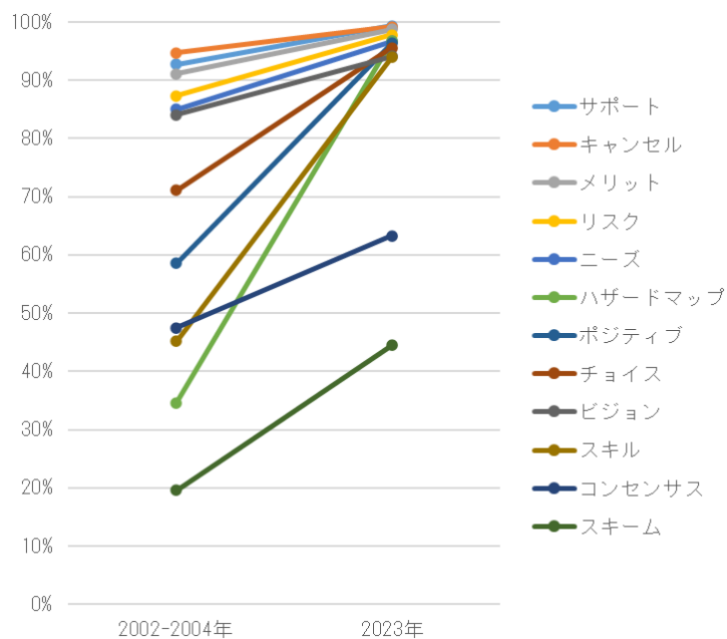


図9 認知率の経年変化 (%)

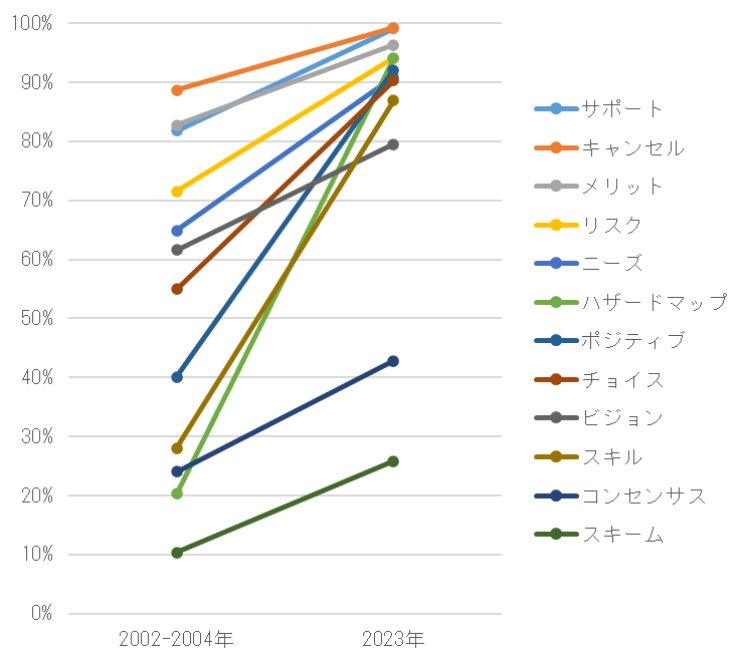


図10 理解率の経年変化 (%)

これらの表と図から、調査にかけたすべての外来語について、約20年の間に、認知率も理解率も上昇していることがわかる。多くの語において、約20年前にもある程度高い数値を示していた認知率よりも、20年前には低い数値にとどまっていた理解率の方が、数値の上昇の幅が大きくなっている。「ハザードマップ」「スキル」は、認知率・理解率いず

れにおいても、グラフの傾きが非常に急で、上昇幅が特に大きい。一方、「スキーム」「コンセンサス」は、認知率・理解率ともに高くない位置にありながら、上昇幅も小さい。このように語によって上昇幅に差が生じている事情について、考察が必要である。

5.2 外来語と既存語の選好の経年比較

外来語と既存語の選好に関する調査は、3.2 で述べたように、2000 年に行われた調査（文化庁 2000）と 2023 年に行われた本調査とでは質問文や選択肢が大きく異なるため、2つの調査による経年比較を行うことは難しい。一方、3.2 に記したように、2000 年調査と同じ質問文と選択肢で行った調査に、2016 年に行われた調査（文化庁 2016）があり、この2つの調査の比較は可能である。そこで、2000 年調査と 2016 年調査との間で経年変化を観察し、あわせて、2023 年の本調査で把握できるスタイル差を確認してみたい。表 3 は、3つの調査から「外来語を使う」と回答した人の比率をまとめたものである。語の配列は 2016 年の調査での数値が高い順とした。

表 3 「外来語を使う」の回答の比率（%）

外来語と既存語の対	2000 年	2016 年	2023 年(親しい人に話す)	2023 年(他人に書く)
ワイン/ぶどう酒	75.6	82.5	97.2	96.4
スーツ/背広	52.8	68.2	86.4	83.5
ゲット/獲得	14.0	38.0	78.5	31.7
オープン/開店	34.6	35.2	82.8	59.2
トータル/合計	13.3	13.0	32.8	11.4

表 3 によると、2000 年調査と 2016 年調査との間で、「ゲット/獲得」「スーツ/背広」のように、「外来語を使う」が大きく増えた対もあれば、「オープン/開店」「トータル/合計」のように、ほとんど変化のない対もある。

2023 年の本調査におけるスタイル差は、「ゲット/獲得」「オープン/開店」「トータル/合計」のように、「親しい人に話す」低文体で外来語を選好する傾向が顕著になる対もあれば、「ワイン/ぶどう酒」「スーツ/背広」のように、スタイル差がほとんど見られないものもある。

なお、2000 年調査のデータを分析した研究に、久屋（2016b）がある。

5.3 外来語・和語・漢語の選好のスタイル差の経年比較

2.4 で述べたように、外来語「サポート」、和語「手助け」、漢語「支援」の 3 語の選好におけるスタイル差の経年比較が可能のように、国立国語研究所による 2004 年の調査（3.1 の（2）、国立国語研究所 2005）と 2023 年の本調査とで全く同じ質問文を設定し

た。その調査結果のデータをグラフにまとめたのが、図 11 である。

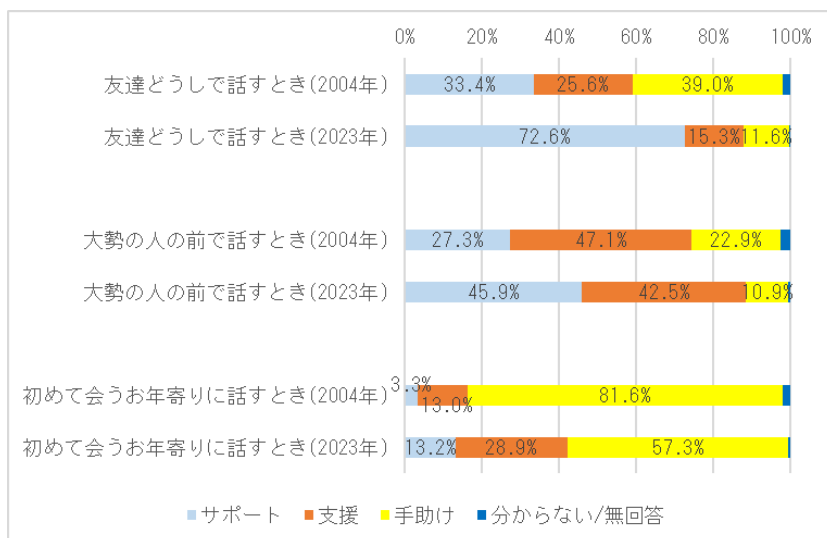


図 11 「サポート」「支援」「手助け」のスタイル差 (%)

場面への配慮のない低文体での自然な用語選択が行われる「友達どうして話すとき」では、2004年では「手助け」が最も多かったところから、2023年では「サポート」が圧倒的になるように大きく変わったことがわかる。約 20 年の間に、自然な言い方が和語から外来語に移行したのである。そして、高文体での用語選択が行われる「大勢の人の前で話すとき」では、「支援」が多数派であったところから、「支援」と「サポート」がほぼ同じぐらい多いところへと変わっている。約 20 年の間に、高文体にも「サポート」が進出したのである。「初めて会うお年寄りに話すとき」では、「手助け」「支援」「サポート」の順に多いことは変わらないが、「手助け」の圧倒的優位から、「サポート」が一定の位置を占めるところへの移行が進んでいる。

スタイル差に基づく使い分けは、2004 年段階で既に形成されていたが、2023 年の本調査ではその使い分けにおける「サポート」の占める領域が拡大し、和語「手助け」や漢語「支援」が担っていた領域を侵食していると見ることができよう。

なお、2004 年調査における「サポート」のデータを分析した研究に、田中 (2007a)、久屋 (2016a) があり、2004 年調査から 2023 年調査にいたる「サポート」の変化を、20 世紀前半にこの語が日本語に借用されて以来の定着過程と結びつけて述べた研究に、田中 (2023) がある。

6. おわりに

本報告は、「現代日本語における外来語使用実態調査」について、質問の設定のねらいを述べた上で、調査結果の概要を示し、約 20 年前の同趣旨の調査結果との経年比較の要点を記した。

別に公開している、調査票、単純集計表、ローデータを用いて、現代日本語の外来語について、様々な角度から研究が行われることが期待される。

参考文献

相澤正夫 (2012) 「『外来語』言い換え提案」とは何であったか (陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編『外来語研究の新展開』おうふう、pp.133-147)

<https://repository.ninjal.ac.jp/records/3616>

朝日祥之編 (2024) 『現代日本語における外来語使用実態調査 (2023年2月調査) 報告書』 <https://doi.org/10.15084/0002000252>

久屋愛実 (2016a) 「外来語使用に係るスタイルの制約—「サポート」と既存語との使い分けにみる話者内バリエーション」 (『社会言語科学』19-1、pp.190-206)

https://doi.org/10.19024/jajls.19.1_190

久屋愛実 (2016b) 「見かけ上の時間を利用した外来語使用意識の通時変化予測」 (『日本語の研究』12(4)、pp.69-85) https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.12.4_69

Kuya, Aimi (2019) *The diffusion of Western loanwords in contemporary Japanese: A variationist approach*. Tokyo: Hituzi Syobo.

国立国語研究所編 (2004a) 『外来語に関する意識調査: 全国調査』

<https://repository.ninjal.ac.jp/records/2319>

国立国語研究所編 (2004b) 『行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査: 自治体調査』 <https://repository.ninjal.ac.jp/records/2318>

国立国語研究所編 (2005) 『外来語に関する意識調査II: 全国調査』

<https://repository.ninjal.ac.jp/records/2320>

国立国語研究所「外来語」委員会編 (2006) 『外来語言い換え手引き—分かりやすく伝える—』 (ぎょうせい) <https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/>

国立国語研究所編 (2007) 『公共媒体の外来語: 「外来語」言い換え提案を支える調査研究』 (国立国語研究所報告126) <https://repository.ninjal.ac.jp/records/1303>

田中牧郎 (2007a) 「漢語・和語と比較した外来語に対する意識」 (国立国語研究所2007所収、pp.302-310) <https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/houkoku2-3.pdf>

田中牧郎 (2007b) 「外来語定着度データの分析」 (国立国語研究所2007所収、pp.311-322) <https://www2.ninjal.ac.jp/gairaigo/Report126/houkoku2-4.pdf>

田中牧郎 (2023) 「日本語語彙の近代化における外来要素の受容と調整」 (『歴史言語学』12、pp.91-106)

文化庁 (2000) 『平成11年度国語に関する世論調査』 https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/92701201_20.pdf

文化庁 (2016) 『平成27年度国語に関する世論調査』

付表 本調査の調査対象語と、比較できる過去の調査との関係

大問 番号	外来語	(2)「外来語に 関する意識調 査II」(2004年 実施)	(4)「外来語定 着度調査」 (2002～2004 年実施)	「国語に関 する世論調 査」(2000年 実施)	Kuya(2019)に おけるコーパ ス高頻度語 (参考)
1	ゲット			○	
2	ルール		○		○
3	チャレンジ				○
4	チャンス				○
5	ワイン			○	○
6	プロセス				○
7	オープン			○	○
8	トータル			○	
9	スーツ			○	
10	イベント		○		○
11	リスク		○		○
12	スキーム		○		
13	メリット		○		○
14	ビジョン		○		
15	ポジティブ		○		
16	コンセンサス		○		
17	ニーズ		○		○
18	スキル		○		
19	ハザードマップ		○		
20	チョイス		○		
21	キャンセル		○		
22	サポート	○	○		